

1. 昭和7年の家族写真。左は長女・富田のりさん（鶴川在住）、右は妻の錦 2. 昭和9年3月撮影。子どもたちと過ごす子煩悩な根本の貴重な写真。家族との時間は僅かだった 3. 昭和19年11月23日に遺影として撮った写真。軍服の勲章は、引き揚げの際にすべて中国に置いてきた 4. NHKの番組企画で米・ハートレイ大佐とのワンシーン 5. 根本博に関する書籍の中には、戦後、蒋介石を助けたエピソードを紹介しているものもある



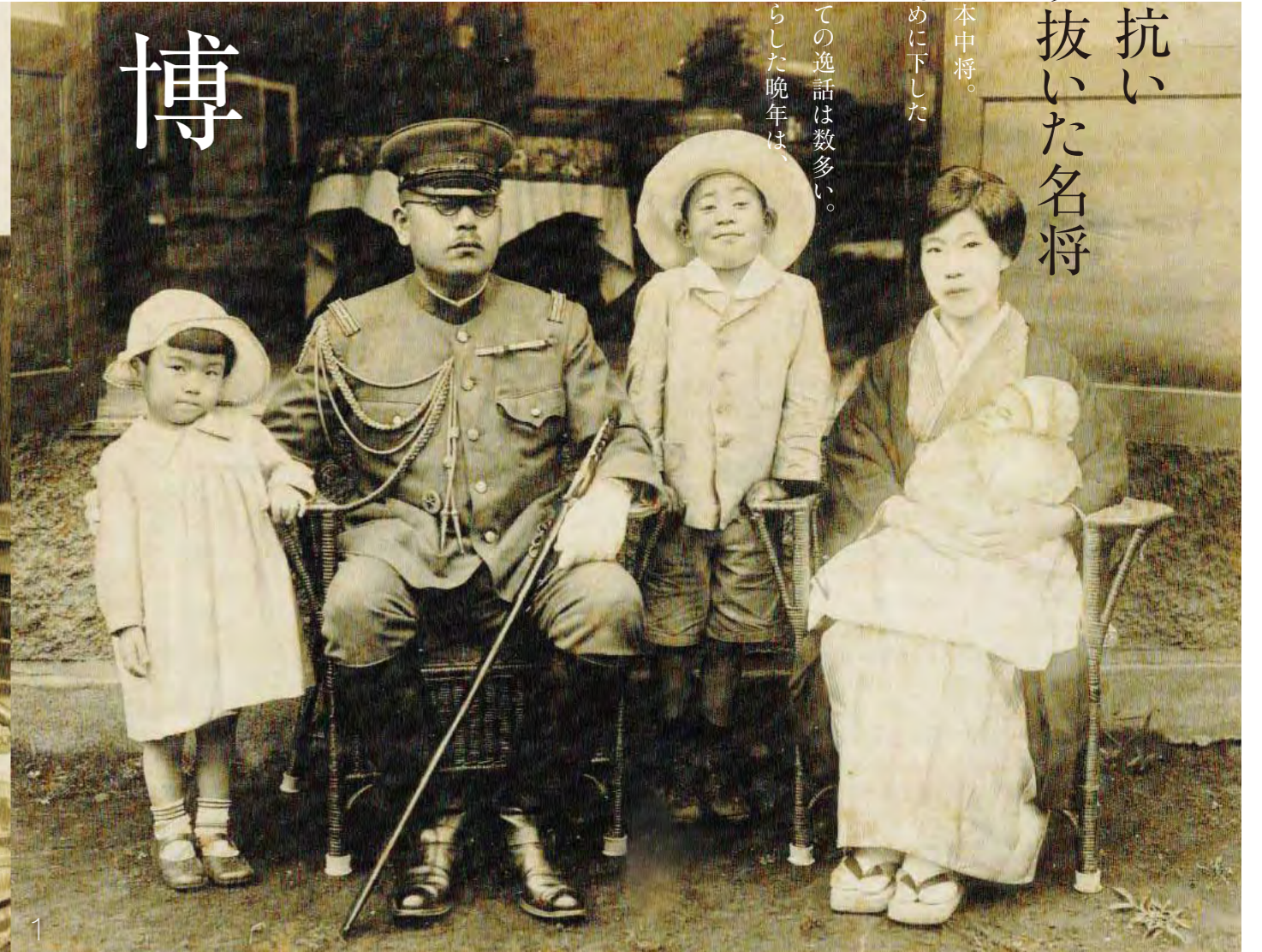
根本博

陸軍中将

特集 2

停戦命令に抗い 人命を守り抜いた名将

鶴川を終の棲家とした根本中将。敗戦時に居留民を守るために下した英断をはじめとして、豪快で情に厚い武人としての逸話は数多い。戦後、鶴川村で静かに暮らした晩年は、釣りと酒をこよなく愛すよき家庭人だったという。



根本博（ねもとひろし 1891-1966） 大日本帝國陸軍軍人。陸軍中将。勲一等・功三級。妻・錦（すず）との間に二男二女。生まれ故郷・須賀川市仁井田の墓に眠る

1891（明治24）年、根本博は福島県岩瀬郡仁井田村（現須賀川市）の農家に生まれた。幼い頃から頭脳明晰で、仁井田村で初めて仙台陸軍地方幼年学校に合格し、陸軍士官学校、陸軍大学を経て、職業軍人の道を歩む。43歳で大佐、49歳で中将まで昇進する。日中戦争以降は、中国の現地司令部で参謀長や司令官を務めた。

1945年8月15日、駐蒙軍司令官だった根本は内モンゴルに近い張家口で玉音放送を聞く。本国から武装解除命令が下るも、攻撃を止めないソ連軍の満州侵攻に対し、居留区の地元民や邦人、部下の命を守るため、自身の責任で敢然と武装解除を拒絶、ソ連軍との戦いを決断した。根本率いる駐蒙軍はソ連軍の執拗な追撃を退け、居留民脱出の時間を稼いだ。そして在留邦人4万人の帰国と、35万に及ぶ将兵の復員を見届け、最後の船で日本へ戻った。

復員した根本が初めて鶴川村（現町田市能ヶ谷）の地を踏んだのは、1946年8月。当時15歳だった長女・富田のりさんは、部下3名を連れて戻った父の姿を覚えていた。「鶴川には出征中に知人の勧めで移

り住んだので、父にとっては初めての土地。鶴川駅で「根本の家はどこだ？」と駅員さんに聞いたそうです。」

釣りが好きで、薬師池や時には小田急線に乗り、多摩川でも釣りを楽しんだ。道普請※にも積極的に参加した。農家育ちで鎌の扱いは上手く、自宅横から白洲次郎の家近くまで、草刈りや溝さらいを地域の人たちと行った。「広袴に住んでいた国士館大学創始者の柴田徳次郎氏が毎朝馬に乗って散歩をする途中、必ずうちへ寄ってお茶を飲みながらお喋りしていました。戦後の方が印象に残っています。包容力があつて誰にでも優しい。普段は寡黙ですが、話し始めるとユーマアたっぷり面白く、父がいると家の中は笑いが絶えませんでした。」

1966年5月、孫の初節句を祝った後に体調を崩し、当時できたばかりの市民病院に入院。退院後、自宅で休養している時、突然「根本博はばらばらになつてしまつた」と呟いたという。自宅で迎えた臨終の瞬間だった。享年74歳。葬儀には、蒋介石から届いた花環も飾られていた。町田で過ごした余生は約20年。当時の様子を知る人も少なくなっている。

※道普請（みちぶしん）：地域住民で行う道路や水路などの修理・草刈り等の勤労奉仕作業